

一九七七年十一月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポルケ谷九〇四 電話(03)3337714649

振替 東京0158431 労金 東京労金本店No1154163

FAX(03)329915367

購読料 月額500円 6ヵ月前納制

〈もくじ〉

■ 巻頭言 ■

タイムリーな日教組大場委員長の提起…………… 2

国連は帝国主義国の道具に…………… 2

—— PKOは抑圧機構に変質 ——

今こそ田辺社会党は金丸ボスと手を切れ…………… 7

—— 「佐川」の徹底追及なしに政治改革なし ——

不屈にたたかう釧路の仲間たち…………… 10

—— 一九九二年、国鉄闘争最前線 勅使河原 千津 ——

読者からのおたより…………… 18

刊 旬 社 会 通 信

NO. 517

一九九二年九月二一日

一九九二年九月二一日発行
(毎月一日・二一日・三十一日三回発行)

■ 巻頭言 ■

タイムリーな日教組大場委員長の提起

「憲法擁護・自衛隊海外派兵に反対する国民会議」

日教組定期大会で大場委員長は、「憲法擁護・自衛隊の海外派兵に反対する国民会議（仮称）」の結成をこう提案した。

「いま私たちは、自民党などが超憲法的な論理と行動で、自衛隊を海外に送り出そうとしていることを、どうしてもやめさせなければならぬと思います。」

本大会で『あなたは子どもを海外に派兵しますか』という小冊子をお配りしましたが、これは、そのための日教組の手始めの仕事です。

同時に、PKO協力は強行されましたが、これを実動させないための国民運動をつくることが重要です。そのため『憲法擁護・自衛隊の海外派兵に反対する国民会議（仮称）」の結成を提案します。

日教組は、本大会終了後直ちに社会党、護憲連合、総評センター、友誼組合など民主団体に呼びかけ、ぜひ実現したいと考えます。」

まさに時機に適した提起である。というのは、自民党の小沢調査会といわれる「国際社会における日本の役割—安全保障問題に関する提言」はもちろん、労働組合の側からも「新しい政治を考える労働懇談会」（略称NPUC、構成組合は鉄鋼労連、電機、自動車、全電通、電力、全日通、合化、造船重機、商業労連、交通労連、航空同盟、都市交、全印刷、全通、自治労の一六組合）などが、小沢調査会の認識と同様の安全保障への立場から、憲法見直しをせまっているからだ。もちろん小沢提言よりはかるやかだが。

現在はまさに「憲法体制」の危機。この危機を打ち破り、憲法が定める理念と世界の理想を実現するには、この大場提言の実現以外にない。組合レベルでも社会党でも、そして市民の間にも「憲法を守ろう」との声は高まっている。この提言に、みんなで力を合わせようではないか。

(滝)

国連は帝国主義諸国の道具に

— PKOは抑圧機構に変質 —

世界政治はいま歴史的な大激動期にある。「世界新秩序」がもさくされる背景だ。ソ連・東欧の崩壊で社会主義思想の理念と理想が、歴史の博物館へとたたき込まれてしまったのか。それとも「冷戦」終焉後、混乱と動揺を深める資本主義世界体制の矛盾の新たな展開が、科学的社会主義の思想を不死鳥のように蘇（よみがえ）らせるのか。世界はまさに不透明だ。今後の世界政治の動向やいかに？

「南北」問題が世界政治の焦点に

現代は第一次世界大戦前後、あるいは一九二〇年代の世界に帰ってしまったかのような。大ドイツ主義・大セルビア主義の風潮、そして世界各地に蔓延（まんえん）する地域紛争、貧困にあえぐアフリカ、アジア、ラテンアメリカの民衆たち、さらには傍若無人（ぼうじやく）

くぶじん)なアメリカの軍人介入行動、等々。

違いも多々ある。小なりといえども社会主義建設にむけ、全国民の士気を鼓舞するキューバ、朝鮮民主主義人民共和国の存在。貧困と大国の横暴に抵抗する民衆レベルのNGOの諸活動。そしてなによりも大きな相違は国際連合に一七六もの国々が加盟しているという事実だ。ここに、国連を中心とする「新秩序」が芽ばえる根柢がある。これら一七六の国々は相互に自由で平等か。もし「そうだ」という人がいわば、それはトンカチ頭持ち主だ。

一七六の国々は、経済的にはIMF、世界銀行によって、また政治的にもさまざまな国際機関によって、はっきりとしたランク付け、序列が形成されているからだ。主要国はいわゆるサミット構成国とG7。これが今日の「列強」だ。次にOECD加盟の二四ヶ国。この下に構造調整、管理が必要な国として、低所得重債務国二六ヶ国、中所得重債務国二〇ヶ国、低所得一般債務国九ヶ国、中所得一般債務国一三ヶ国、その他と分類される。

G7の世界に占める地位は巨大ですさまじい。この七ヶ国だけで世界のGNPのじつに約七〇%を占めるのだから。とりわけいちじるしいのが日本とアメリカ。この両国で四〇%にのぼる。

日本と関係の深いアジアには二四の国々がある。アジアに占める日本のGNP比は約七〇%。GNPを各国とくらべれば日本が約三兆ドルにたいし、中国〇・六兆ドル、台湾〇・一一兆ドル、フィリピン〇・〇四兆ドル、インドネシア〇・〇八兆ドル、ベトナム〇・〇一二兆ドルという状況。ここに、「ガリバー日本」の姿が浮き彫りになる。

こうしたなか、「冷戦」後の世界は新たな対立と紛争の時代を迎えている。ボーダレスの時代といわれながらもますますふえる国境線、民族・人種・文化・宗教的対立から一挙に噴出した地域・民族紛争、さらに「東西」問題に代わる古くて新しい「南北」問題の急浮上。

G7も例外ではないだろう。ミュンヘン・サミットは「政治宣言」で、「ついに再統合された欧州のみならず、アジア・太平洋地域その他の世界においても、責任を共有する新しいパートナーシップへの道が開かれた。我々は、協力が対立にとって代わる時代に入りつつある」と謳った。しかし、社会主義国という彼らの共通の敵が消えた現在、政治宣言のいう「パートナーシップ」、「協調」が、どのような姿をとるのか、むしろ「競争」が全面に出てくるのではとの不安が強い。北米自由貿易圏構想(NAFTA)合意と三極化への不安、EC統合策とウルグアイ・ラウンドのゆき詰まり、等々。

変質する国連、PKO

「冷戦」の終焉は国連のあり方に大きな影響を与えている。国連は一九四五年六月二六日、第二次世界大戦の戦勝国五一ヶ国で結成されたが、一九九一年末の加盟国は一七六ヶ国となった。

国連の理念を示すのが国連憲章だ。第一次世界大戦は国際連盟を生んだ。しかし、国際連盟は再び第二次世界大戦を惹起し破産した。その教訓から国際連合は、国際の平和及び安全維持のため、「有効な集団的措置」をとると、「国連軍」創設を第四一条、第四二条、第四三条に非軍事的強制措置、軍事的強制措置、兵力使用に関する特別措置を盛り込み、第四七条ではこの軍を統轄する組織として軍事参謀委員会の設置を謳った。

国連は朝鮮戦争時を除き、過去四五年間「国連軍」という独自の武装力をもつことはな

かった。正確にはもてなかつたのである。というのは、五つの常任理事国が拒否権をもつたからだ。そのなかで苦肉の策として生み出されたのが、日本の国会を二分したPKO活動だ。だから、PKO活動には(1)停戦合意、(2)受け入れへの合意、(3)活動の客観性(中立性)が条件とされ、「超大国」ソ連やアメリカではなく、中立国のスウェーデン、ノルウェー、デンマーク等の主として北欧の軍隊が派遣されたのだ。ちなみに一九七五年一月一日発効したスウェーデン国連待機軍に関する法律は、(1)軍内に待機軍の機能をもつ、(2)国連の要請で派遣し、国連の指揮下で活動すること、(3)この目的のために契約された要員によって構成することを定めている。

こうして、国連発足いらい今日までの国連のPKO活動は二六回におよぶ。しかし、一九八八年以降、顕著な変化が生まれた。というのは一九四五年から一九八八年までの四三年間にPKOは一三回派遣されたにすぎなかったが、一九八八年以降九一年末のわずか四年間に、一三回も派遣されていることだ。旧ソ連・東欧の崩壊で、国連安保理の性格が根本的に変化したことによるものだ。その典型が「イラク制裁」を口実に組織された多国籍軍による湾岸戦争、そして国連イラク・クウェート監視団(一九九一年四月)だ。

このように、国連の変化はPKO活動の変化としてまずあらわれている。それをさらに加速させているのが、六月一七日、ガリ事務総長が安保理に提出し、今年秋の国連総会で審議される「平和のための行動―予防外交、平和創造、平和維持」と題された文書だ。

この文書の特徴は、「拒否権の行使は、冷戦の終結によって、一九九〇年五月三十一日以来なくなり、国連に対する要求が高まった。さまざまな事情―国連はそれを管理できるように創設されていなかったし、その手段も与えられていなかった―によって、かつては無能化されていた国連の安全保障機能は、いまや紛争の予防と解決、ならびに平和の維持のための中心的手段となっている。」との視点から(1)予防外交、(2)平和創造、(3)平和維持の手法を明らかにしていることだ。

とりわけ注目されることは、予防外交について「暴力が発生する以前に紛争を解決することをめざす」といい、「予防展開」、「平和強制部隊」の措置に言及していることだ。これは従来のPKO活動の基本原則を根本的に否定するもので、国連安保理、とりわけ五つの常任理事国が派遣を決議すれば、いつでもどこにでもPKO部隊を派遣しようというものだ。日本でのPKO協力法審議の時、「平和維持隊への参加に当たっての基本方針(五原則)」が論議され、法案にもりこまれたが、当事者の国連ですでにこの「五原則」放棄がたくらまれているということである。

このガリ報告に、ミュンヘン・サミットの政治宣言は、「予防外交、平和創造および平和維持にかんする国連の事業に対する価値ある貢献。必要な政治的支持及び手だてを提供する」といい、パウチャー・アメリカ国務省報道官も「一般的な意味で平和維持の議論を刺激する」と歓迎の意向を表明するばかりか、九二年アメリカ国防報告では(1)PKOについてはじめて「平和維持活動への支援」の項目を設けたほか、(2)国連の役割の見直し、PKOの拡大とそれへの参加を強調している。

世界制覇をめざすアメリカ

この動きはアメリカによって加速されずにはおかない。これまでもアメリカは「世界の憲兵」として、強大な経済力と軍事力を背景に不法のかぎりをつくしてきた。その典型が、

「裏庭」中南米・カリブ海での軍事侵攻作戦だ。アメリカはこの地域で少しでもアメリカの利害を犯すと思われる政権が誕生したとき、つねに武力で打ち倒した。

最近では一九八八年のパナマ侵攻がそうだ。日本ではとうてい信じられないことだが、パナマではトリフォス將軍の時代から、貧しい民衆がもつ反米感情を軍が体現し、民族独立運動、反米闘争の先頭にたつてきた。ノリエガ將軍もそうだった。パナマにはアメリカの「死活的要衝」パナマ運河がある。トリフォスとカーターの協定で、このパナマ運河は一九九一年一月三十一日の午前零時にパナマに返還される。

パナマ運河がパナマに返還されたとき、パナマがアメリカの言うことに従わなければ……。アメリカの不安はこれだった。ノリエガはトリフォス以来の伝統を受け継ぎ、反米闘争の闘士として国民に大きな支持を得ていたからだ。アメリカのパナマ侵攻と前後して、世界的に麻薬キャンペーンが展開され、その張本人の一人にノリエガがでつち上げられた。そして侵攻、ノリエガ逮捕の図式である。

「裏庭」でのアメリカの手法である。この手法を全世界で展開する条件を「冷戦」の終焉はつくった。たとえばテロを口実とするリビアのカダフィへの批難と攻撃。その象徴が湾岸戦争だった。つまり、社会主義体制の後退を契機に、アメリカの利益、資本主義の利益に好ましくない人物、国家をいちはやく抹殺しようというのだ。これがアメリカのめざす「世界新秩序」である。だから、湾岸戦争後、アメリカの公式、非公式の外交文書はつねに湾岸戦争の教訓と世界新秩序から始められる。たとえば次のようにだ。

世界の超大国はアメリカだけ 「この国防計画指針は、ソ連邦の崩壊、対外的・対内的帝国の解体、世界的規模の権利要求と影響力をもつイデオロギーとしての共産主義への不信、よって生み出された具体的に新しい状況に対応するものである。新しい国際的状況はまた、イラクの侵略―それは冷戦後の最初の紛争であり、アメリカの世界的指導性のもとの限定的な出来事であった―にたいするアメリカと連合諸国の勝利によって形成された。これら二つの勝利に加えて、アメリカ主導の集団安全保障体制へのドイツと日本の統合、および民主的な『平和地帯』の創設という、目に見えにくい勝利もあった。」（「米国防計画指針」九二年二月一八日）。

湾岸戦争は世界新秩序を告知 「湾岸戦争を通して、われわれはより良い未来―紛争を解決するために武力を用いてはならないというコンセンサスと、そのコンセンサスが破られる場合には世界中が立ち上がるというコンセンサスの成長によって結ばれた新しい世界共同体―の微かな光を捉えた。われわれは湾岸危機において世界の指導的諸国が侵略にたいして集団で禁輸を実施し、国連の創始者たちが夢みた役割を国連が果たすのを目撃した。しかしわれわれはまだ転換期にとどまっている。

しかし、湾岸危機は、世界共同体がいまやなにをなしうるかを示したし、世界共同体は、挑戦に対応する行動そのものを通じてみずからを強化した。私は湾岸危機が新しい世界秩序のつぼであったことを歴史が記録することを期待する」（「アメリカの国家安全保障戦略」、ホワイトハウス、九一年八月）

前進ブレゼンスを展開 「重要な地域において前進ブレゼンスを展開するために必要な戦力を維持し、危機に効果的に対応し、信頼できる核抑止力を維持し、必要とされる場合には、われわれの戦力を再構築する国家的能力を保持する」（「アメリカの新防衛戦略についての演説」一九九一年九月）。

ここに、アメリカの「世界新秩序」への構想がみえる。

第一は、アメリカ主導の集団安全保障体制の構築だ。アメリカは旧ソ連の核兵器体系を除けば、他国がとうていおよばないすさまじい軍事力をもつ。だがアメリカにも弱点がある。経済力以上に軍事力が膨張してしまったことだ。九二年版「アメリカ国防報告」によれば、湾岸戦争での戦費は六一億ドル。アメリカが負担したのは五八億ドルにすぎないことだ。ちなみに戦費拠出国はサウジ一五六億ドル、クウェート一六〇億ドル、アラブ首長国連邦四〇億ドル、日本一〇〇億ドル、ドイツ六四億ドル、韓国二・五億ドルというものだ。

現在のアメリカにとつての「潜在的脅威」は、旧ソ連が今後どのように推移し、国際政治にどのような影響を与えるか、そして核管理は、ということもあるが、ドイツ、日本の経済力であろう。湾岸戦争で示されたアメリカの巨大な軍事力、アメリカ・ナシヨナリズムを背景に、軍事費の肩代りという手法で両国経済の破綻疲弊をはかろうとするのではないか。日米経済戦争はこうして政治と密接に絡み合い、新たな段階にはいる。

第三は、アメリカ主導の「国連軍」の創設と、国連の利用だ。日本ではとりわけそうだが、国連の決議・決定という宣伝には逆らいがたい雰囲気がある。PKO法でも政府自民党は国連憲章、国連決定、PKOはノーベル平和賞をもらったと、論議の焦点をボカスことに利用した。この点興味あるのが米上院外交委員会でのペーカー國務長官の発言だ。彼は「国連軍」とアメリカとの関係について、「可能ならそうした軍隊をもちたい」としながら、「アメリカの男女の命を国際的な指揮下にゆだねることは理解できない」として、「われわれはアメリカの指揮でいく」と述べる。アメリカの意図は、国連に名を借りたアメリカ軍、それへの他国の動員なのである。

第三は、他国を圧する軍事力の維持、そしてどんなかたちの戦争、紛争にも即応できる軍事プレゼンスの保持だ。アメリカが戦略地域とするのは(1)旧ソ連―焦点は核管理、(2)西欧―NATOの統合指揮機能の確保、(3)東欧―中東―ロシアの影響力の排除、(4)東アジア―朝鮮半島、中国対策、(5)中東―南西アジア―戦略物資石油の確保とインド・パキスタンの核管理、(6)ラテンアメリカ―キューバ対策、というものだ。この他、低強度紛争としてテロ、麻薬、暴動があげられる。

日本はアメリカと共同歩調

アメリカの構想するこの「世界新秩序」の枠組みに、全面協力の姿勢を明らかにしたのが、(1)日米はアジア・太平洋地域に死活的な利害、(2)米国はこの地域の平和と安定維持のため米軍の前方展開の維持、(3)日本は在日米軍の駐留経費をより高い負担率で負担、(4)自衛と米軍の協力拡大で一致した「日米グローバル・パートナーシップに関する東京宣言」(九二年一月)であり、「グローバル・パートナーシップ行動計画」それに今、小沢を中心にまとめられつつある自民党の「国際社会における日本の役割に関する特別調査会」の報告だ。原案の提出は二月。八月には最終案がだされ、九月に総会を開き決定する。

日本は国連に弱い。しかし、その国連はPKO活動のあり方一つとってもそうだが、大きく変質しようとしている。アメリカは国連という冠で自己の利益を追求しようとしているし、日本は国連の権威で自衛隊の国軍化をはかり、憲法改悪に着手しようとしている。こうして、国連の本質が問われるのである。

今こそ田辺社会党は金丸ボスと手を切れ

——「佐川」の徹底追及なしに政治改革なし——

佐川事件の追及に本気で取り組め

いよいよ佐川汚職事件がウミを吹き出し始めた。巨額の金が自民党政治を動かしていることが白日のもとにさらされつつある。自民党のドンといわれて久しい金丸信代議士（党の副総裁は辞任したが議員はそのまま）に佐川急便は五億円、ヤミ献金をしていたことがバクロされた。しかも金は一回ではなく二回で十億円のはずだと一部マスコミはいわゆる「余罪」を書きたてている。金丸氏といえば、田辺社会党委員長を通じて「社会党は左派を切れ」とことあるごとに社会党に介入し、解党工作を続けてきた黒い権力者である。彼は田辺氏の側近（洪沢利久、小林直人、久保亘など）や、山岸連合会長、江田社民連委員長らとも料亭で会食しては、「自社大連合」とか「政界再編」などについて談合を行っていたわけである。政権党自民党の竹下派をバックに社会党と連合をあやつり、ときには公民に補完させながら自民党政権を維持し続けてきたのである。それだけに竹下派の運営資金、社公民への対策費（加えて会食費も高級料亭だからバカにならない）など年間三、四十億の金をバラまいているといわれている。

金を集めるためには、ロッキード、リクルート、共和、そして佐川と汚職事件になるようないろいろなことを自民党はやるわけである。しかしこれらの汚職による金集めは氷山の一角に過ぎないわけで表には出ない法にはふれない巨大な金が、財界を中心に、これまた巨大な利権を引き換えに集められた財界から自民党や派閥の親分に分配されているのである。したがって考えてみれば汚職を追及するだけはこの本質を解決することにはならないことは云うまでもない。しかし「共和」、「佐川」の国会内外での追及によって、構造的な金権的政治を国民の前にバクロし、国民の意識の高まりと合いまって、「金と政治」にメスを入れる改革への対策の方針を社会党は提起しなければならぬ。

今度こそ社会党が、「田辺と金丸」のクサレ縁をたち切り、徹底した政界浄化を行うべきである。今までのように調査も満足にやらないで国会での証人に質問する姿勢、さらには証人におもねるような弱腰な質問など社会党議員への批判はこの面でもきびしい。信頼を回復するためには、調査のために議員以外の専門家を結集しての対策委員会を設置してこれに当たるべきである。

そして何よりも直ちに金丸氏に衆議院議員の辞任を、徹底的に断固として要求すべきである。これは全国の社会党組織をあげての大衆運動としても展開されなければならぬ。山花書記長のように、金丸の国会喚問を「まだ検討していない。」（八月二十八日読売）などというズレが困るのである。金丸にやっぱり田辺社会党は遠慮しているなどと勤労国民に見られることは間違いない。

先の参院における佐川清・佐川急便グループ元会長に対する証人喚問について、久保亘参議院議員は（当時の予算委員会の理事として）佐川清の病気を理由に証人として出席し

ないことを簡単に認めている。今は久保氏は参院国対委員長である。今度こそしっかりとしないと社会党はダメになる。

「選挙資金の提供をお願いしたこともないし、もらっていない」と一年間いい続けてきた金子新潟県知事がついに辞任した。当然である。三億の内一億円を金子知事が受け取っていたことを選対責任者が認めたことによるということだが、一年間ウソをついていた県民への責任は重い。新潟県議会の野党議員の追及はいいかげんであったといわれていることは反省されなければなるまい。

金子知事が辞任したのに金丸議員は、衆議院議員をやめないのは片手落ちであることを世間は一層強く非難している。この世論を逆撫するように金丸氏は議員をやめないどころか竹下派会長も続けるというのだからひどい政治姿勢である。これに代わるべき竹下派の竹下登元首相、小沢一郎会長代行などいづれも佐川マナーに汚染されているお家の事情があるからだが、竹下、小沢両氏への追及を忘れてはならない。

政治改革は「佐川追及」の成否にかかる

全国書記長会議が八月二十一日に開かれたが、提出された本部の方針も各県書記長の対論もお粗末で話にならない。第一線活動家は失望をかくさない。全般的な書記長会議の内容とその検討は次号にゆずるが、政治改革についての基本的姿勢を見ることにする。

まず社会党の方針とか総括は、執行部の保身のために書かれているだけで現実をどう変えるのかの視点からの方針はない。ことに昨年来問題になっている「佐川問題」への見通し、いわゆる先見性はない。そのため自民党を追及し、政治改革を行う意欲は感じられないのである。ほんとうの政治改革は「共和」「佐川」の追及のうえでなければできないということがわかっていない。政権党であり国会の多数派（参院も事実上は多数派）である自民党が自らの不利になるようなことを普通の状況下でやるわけがないのである。それをやるためには自民党が汚職と金権フハイで動きのとれないところまで追いつめなければならぬまい。——そこから始めて改革が生じる。

書記長会議でのこれについての方針は、「政治改革に関連して臨時国会で山場を迎える」と予想される共和・佐川問題について党はその徹底究明のために全力を挙げます。」といているがわずか五行である。これを見ても田辺執行部の無定見がわかるように思う。社会党が選挙に勝てない理由はいろいろあるわけだが、なんといつてもその最大の理由は、社会党に対する信頼性がないことである。いくつか列挙してみる。

(一) 党首のもつイメージ、言動が極めて大きいことはいうまでもあるまい。野党第一党の社会党が自民党を倒して政権をとるといながら、自民党の黒いボスと時折り会って話合っている。それも「ひそかに高級料亭で」とマスコミから報道される。社会党を見ている各層から社会党はどうなっているのかと疑問が出るのは当然であろう。清潔な政治のため、憲法をもとにたたかう社会党という言動を貫いた土井たか子前委員長のあとだけに、なおさら黒に近い灰色が田辺委員長の色イメージだと若い人たちがいうのである。

(二) 責任をとらない田辺社会党という印象が定着している。田辺委員長は連合の山岸会長らと組んで、土井委員長（当時）を昨年四月に統一地方選挙の責任というところで辞めさせ

ている。田辺氏自身も当時副委員長でありながらであるから、なおさらマキャベリストと見られるわけだ。昨春の統一地方選挙の最大のマイナスは、東京都知事選であったのである。あの党都本部の醜態が全国的に影響したのである。今年の参院選でも党都本部は、無責任にも国会で牛歩戦術や議員辞職までやった「PKO」反対闘争を否定する森田某をかつぐというこれまた醜態をやった責任者が本部の渋谷副委員長だから、田辺氏の評判はいよいよ悪くなる。渋谷氏は左派から江田派へ（しかし最終的には江田三郎氏と行動を共にしていない）そして最右派へと替わり身の人で、今は田辺側近第一号である。この人も責任をとらず副委員長にすぎりついている。

(三) 一貫性がなく政治の重要問題にいつも動揺する中央本部方針についてゆけないという第一線活動家が多く、集中性、持続性、行動性に常に水をかけていること。活動家が中心になつて動かない党は勤労国民、インテリ層にソッポを向かれる。

(四) 国会活動はあまりにも妥協的であり、労組のいいなりの法案に対する賛否の態度が多い。山岸氏などが法案審議に介入しすぎると国民は見ている。今参議院選でも社会党比例区候補トップは薬科電気労連委員長であり、連合の副会長であった。

アイヌ民族の代表者は当選できない順位におかれていた。労組中心主義がまたまた顔を見せてる。党と労組の関係の見直しを社会党側から出すべきである。但し社会党と労組の関係は重要性をもっている。問題はお互いに介入しない真の協力、共闘の関係を築くことである。

佐川事件と政治はどうなる

佐川事件は金丸信竹下派会長の五億円ヤミ献金と金子新潟県知事への一億円のヤミ選挙資金によって幕を切って落とした。金子知事は知事を辞任したが、金丸氏は副総裁を辞めただけ。副総裁は自民党の役職であり、いわば自民党内の内輪の話である。公的な職務となれば衆議院議員の辞任が当り前である。マスコミも甘い。議員まで辞めろというキャンペーンがないのである。金丸・竹下・小沢のねらいは①金丸辞任を盾に極力他の議員（二十人・二十二億円のヤミ献金）これは大口だけで小口は何百人といるのだ）への追及を避けようとしている。②したがって金丸氏とその周辺には十億とも二十億ともいわれる他のヤミ献金の追及を逃れようとしていること。③竹下派の会長は最初から辞める訳はなく、他の野党へもにらみをきかせ、野党へのヤミ献金を一部は表面化させながら「佐川」追及を最小限にする取引が行なわれよう。これらのなかで「親分金丸」の権威を維持しようとしている。

さらに政治の方は、野党の中にも金を受け取ったものがたなどとなれば、自民からも加えて新党をつくる動きがでてくる可能性は充分にある。野党の中にはすでに自民の一部を含めての新党を考え、社会党の右派（政構研）の一部と民社プラス社民連の合同案を意図しており、その背景として電通、電気労連、自治労の一部などを中心に民社系労組は全面的に動く可能性がある。しかし実際に政党をつくることはそう簡単ではないし、参院選の「連合」選挙に見られるように組合がいかに多く集まっても力にならないであろう。しかしいづれにせよいわゆる「政界」は激動再編に動く秋に入ったといえよう。

（社会通信・政権研究班）

不屈にたたかう釧路の仲間たち

——一九九二年・国鉄闘争最前線 勅使河原 千津——

「釧路へ」

昨年十二月二十五日に中央労働委員会会長名で「三月末までに労使合意に至らない場合は中労委として最終的な解決案を示す」との見解が出され、国鉄闘争が大きな山場にさしかかったこの時、闘争団の地元での取り組みをぜひ見ておきたいと思ひ立ち、国労東日本青年部の渡辺さんとともに釧路闘争団を訪問してみることにした。

釧路へは八十九年二月の清算事業団交流ツアーで初めて訪れ、渡辺さんともこの時に知り合い、同じコースに参加したものと同士が釧路闘争団と今も交流を続けている。

その後渡辺さんは九十年二月に私は九十年九月にそれぞれ訪れているので、二人とも今回で三度目の訪問になる。

三月十三日にまず札幌に入り「国鉄闘争勝利集会」に参加した。そして翌十四日からは駅での座り込み行動などが予定されていたが、先を急ぐ事にして朝のうちに札幌を発った。根室本線の池田でかつての国鉄池北線、現在は第三セクターにされている池北高原鉄道に乗り換えて、本別に立ち寄った。

ここには国労統一物品販売の目玉商品の一つになっている手作りソーセージ工場「スモークハウス」がある。

JR不採用とされ、九十年三月に清算事業団の期限切れと同時にやむなく退職した菊地さんと岡崎さんが始めた工場で、平日は二人の他に帯広闘争団の大崎さんが働いている。

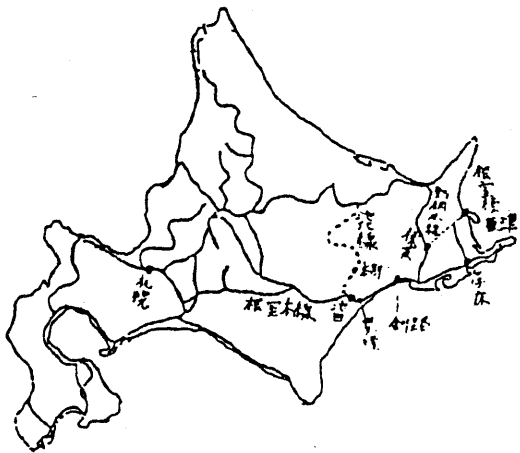
「今でも国労組合員です」と話す二人は、本別をはじめ池北線沿線で、闘争団員を核にすえながら地域の支援体制を維持し、宣伝行動や物品販売などを続けている。

千四十七人と象徴的にいわれているが分割民営化の際、不採用とされたのは約七千六百人、その中で闘争団には残れなかったけれど共に闘い続けている人達の存在が、この闘争を支えている柱の一つになっている。

短時間の交流を終えた後、夕方に最終目的地の釧路へ到着した。

「組織的自活体制」

翌十五日はJR北海道採用を求める全道緊急署名と春闘集會が予定されているので、私達も参加することにして、みぞれまじりの雨の中、朝九時に国労釧路地方本部の中にある釧路地方本部闘争団の事務所に向いた。



釧路地方本部闘争団には、釧路闘争団と帯広闘争団が属している。事務所の奥にかけられている黒板には闘争団員全員の名札が並べられ、その下に各人の役割分担と仕事先が書き込まれている。

闘争団は「組織的自活体制」をとって闘争を維持している、釧路地方闘争団の場合は団員八十八名の内十二名が事務局及びオルグを担当し、残りの六十八名がアルバイトで全員の生活費を稼ぎ出す。

アルバイト担当は一人平均約二十万円の収入をあげ、これをいったん闘争団に収め、その中から各家庭の事情に応じて貸し付けを受けるしくみだから、単純計算で一家族当たり平均十五万円にしかない。しかも夏場でも雇用の機会が少なく賃金も低いうえ、寒さの厳しい冬場は地面が凍結して建築工事などの仕事が減るため、年間を通して目標の月収を上げるのは容易でない。

名札の下に何も書き込まれていないのは、現在仕事が見つからない人だろうか、また「通院中」と書き込まれた人もいる。

九十一年八月に心不全のために亡くなった菅野さんの名札もある。

アルバイト担当の人は少しでも多くの収入を得るためには、どうしても危険な仕事やきつい仕事を選ぶことになる。

オルグ担当も東京など慣れない土地で不便な宿舎での不規則な生活に加えて、闘争資金作りのアルバイトもこなすため心身の負担は大きい。

現在は団として年に一度は全員が健康診断を受けられるよう徹底をはかっているが、雇用保険のない職場も多く、菅野さんの場合も病気が発見された時はすでに病状が進んでいて無念な結果になってしまった。

全国の闘争団で、すでに五名が病死している、釧路ではアルバイト先で大けがを負った人もいる。

「大根洗い」

九十年の闘争団結成当時のアルバイトの一つに大根集荷所での作業があった。

釧路から根室本線で池田方面へ約二時間の豊頃は大根の収穫量は日本一だそうだ。闘争団八名がこの飯場に寝起きしながら、四ヶ月間にわたり、ドロ付のまま大型の水槽に落としこまれた大根をタワシで洗う作業、ベルトコンベアーに乗せ、サイズ別に箱に詰める作業等を行った。

九月に私も一緒に一時間ほど箱詰め作業を体験してもらった、始めのうちは大根一本の重みはさほどにも感じられなかったが湿った床に立ちずめで休みなく大根を上げ下げする動作を繰り返すうちに、しだいに大根の重みが増し腕がだるくなってきたのを覚えている。

もともと、本人は真剣に仕事をしたつもりでも、作業の流れを遅らせるのに役立っただけの気もして、闘争団の人に迷惑をかけたのかも知れないとひそかに反省している。

この時、アルバイトの責任者をして太田さんに当時のことを聞いてみた。

「水に落ちた大根はいったん沈んでもすぐ浮かんでくるんです、それを待ってドロ落としにかかればいいのですが」現場で働いているのは闘争団員以外はほとんどが主婦で、負け

たかない気持ちも手伝って少しでも早く仕事をこなそうと腰をかがめて水の中から大根を持ち上げる。

「一所懸命やるのは良いけれど、がむしゃらになることはないと話合った」そうだが、そこが闘争団の闘争団たるゆえんか、分かっているもついがむしゃらになってしまう。

もつともこの仕事に慣れた主婦でも、朝起きて炊事にかかる前に手をお湯に浸してほぐさないと神経がまひして動かないことがあるくらい「ゆるくない」仕事には違いない。

時給が低いため、闘争団員は毎日十時間働いて日当は八千円。

元来働く事の好きな人達だけに、久々に得た仕事に生き生きと取り組んでいたが、清算事業団で三年間仕事を奪われて過ごした身にはこたえる。

「ずいぶん腰痛やけんしょう炎になった人がいたようですね。飯場にしつぷ葉や飲み薬が並んでいたのを思い浮かべながら聞いてみた。

「肩や首筋の痛みで眠れないから飲んで、その勢いで」寝る人もいたそうだが、言われてみれば酒類の空ビンも並んでいた。

冬場は、成田空港で貨物の運搬の仕事にいたが、当時も今も「闘争団」を承知のうえで受け入れてくれる職場は少ない。豊頃も成田も他労組の紹介でようやく確保した仕事でもあり、十名近くがまとまって一定期間働ける利点はあったが、賃金が低い割りに食費や宿舍などの経費がかさむため、結局どちらもワンシーズン限りになった。

そんな話をしているところへ飯坂さんが入ってきた。本来の仕事は車掌だが清算事業団にいる時に調理師免許を取り、豊頃の飯場で食事の係をしていたので、昼にカレーライスをごちそうになったことがある。

「仕事どうだい?」「いやー調理の仕事でなく出前持ちだわ」「調理師学校出て出前持ちかい、ゆるくないね」

事務局の人と交わす北海道弁はのどかなひびきを持っているが、団としてまとまった仕事確保出来ない現在、新聞の募集欄などで仕事を探すのだが、飯坂さんの場合もなかなか資格が生かせる仕事がなく、したがって安定した収入にもつながらないらしい。

「戸別署名」

何人が集まったところで、車で十分ほどの新興住宅地に入り、私は飯坂さんと組んで戸別の署名活動を始めた。

数件めの家で、六十代半ば位の白髪の女性が玄関を開けてくれた。

「ごめんください、署名のお願いにまいりました、ご存知でしょうか、国鉄がJRになった時に新会社採用されなかった人達が地元JR採用を求める運動を続けています」

「良く知ってる、けど署名はできないわ」

「だめですか」

「あの人達が駅前で座り込んだり、ビラを配ったりしているのも見ているけど、あたしに言わせたら甘えがあるんじゃないかい」

「だってそうでしょ、この辺で仕事が無くなったのはあの人達だけでないでしょ、炭鉱も漁業も仕事なくした人はみんな別の場所で活路を見いだしたでしょ」

「でも何も理由もないのに解雇されたら納得出来ませんよ」

「それはわかるけど、採用してくれないJRにいつまでしがみついているの?」

「北海道の地方労働委員会というところからは、解雇した人を地元のJRの社員として扱うようにと、命令が出されています、JRはそれを見とめようとはしないんです、それに闘争団の人達は、建築現場などで働きながら運動を続けているんです」

「だったらそういう仕事続けたいいいんでない」

「私はこうして署名のお願いをしていますけど、国労の人間ではありません、東京から個人的に応援に来ているんです」

「そうなの?それは大変だね、だけどだったらあんたからも言ってあげればいいんでない、他の道を探せば良いって」

「私にはJRに採用されて仕事に戻るまでがんばって下さいとしか言えません、署名はして下さらなくても良いですから何とか分かっていただいたいです」

「分かるけどね……」

「JRになって一番大変なのは北海道じゃありませんか、赤字だからって電車の本数は減らされるし、ローカル線は廃止になるし」

「まあそれはそうだね、あたし達だって車に乗れないから確かに不便にはなったわ」

「こういうことになるからって分割民営化に反対しただけで解雇されたんですから」

「そうだね……いろいろ考えかたがあるけど……」

結局この人は説得に応じて、と言うよりも話をしていくうちに断わるにしのびなくなつたようで、署名をしてくれた。

釧路の住民の中にはこの女性と同じような考えかたの人もまだいるかもしれないが、話しをしてみれば少しは気持ちを動かしてくれるかもしれない、そんなことを考えながら表に出ると飯坂さんが立っていた、どうやら私を待っていてくれたらしい。

「ずいぶん長く話していましたね、三軒回って、まだ出てこないからまた三軒回って、待っていたんですよ」と笑っている。

「話し込んじゃって、でも署名はしてもらいました」

三月末までの緊急署名であり、釧路の場合一人百名を集めるのが目標だから一件に手間をかけてはいられない。

大根洗いにしろ署名活動にしろ応援に来たのだから足を引き張りに来たのだからよく分からない状況だが、飯坂さんも迷惑がる様子もなく根気よく付き合ってくれる。

そんな調子で、午前中いっぱい署名活動を続けた。

「駅頭宣伝」

十二時からは駅前で国労地方本部の春闘集会が開かれ、闘争団三十四人を含む八十人ほどが参加した。

集会終了後、引き続き駅頭宣伝に参加し、私にとって初めての経験ではあったが、マイクをにぎり住民に向け訴えを行った。

私の次にマイクを持った渡辺さんは「私は東京の大崎という駅の売店に勤務しています。

元は蒲田電車区というところで電車の整備の仕事をしていましたが、闘争団の人達と同じように八十七年三月、紙切れ一枚で好きな仕事を奪われました」と駅周辺にいる住民に直接話しかけるように話を始め、「国労」というだけで仕事を奪われた者の立場から闘争団への理解と協力を訴えた。

渡辺さんのケースについても地方労働委員会から不当配転として救済命令が出され、JRによって、中労委に提訴された後すでに結審しているが不当解雇問題が最優先課題となっているため結論は先送りにされている。

解雇はされなかったもののJRに残った国労組合員には配転・出向・昇格・昇給等、二重三重の差別がつきまとい、仕事の面も長時間労働・サービス残業の強要等、国鉄時代に比べて格段にきびしくなっている。

しかしそうした状況を乗り越え、個人的にも闘争団と連帯して積極的な行動を起こして行くことが、解雇撤回闘争の解決を早め、ひいては、国労に対するすべての不当労働行為を解決することにつながるのだろう。

渡辺さんに続いて釧路闘争団長の村越さんの奥さんが、夫達のJR採用を訴えた。

看護助手として働き、生活を支えながら、東京での宣伝行動にもたびたび参加して、物品販売などでは、いつもはつらつと働いているのが印象的な人だ。

村越さんが「うちのかあちゃん今は太っているけど何年前の写真をみるとげっそりして、あのころは大変だったんだな」と、しみじみ言っていたことがあった。

二人の娘さんのうち上の人は現在保母になり、下の娘さんは看護学校に通っている。

夫のJR不採用、清算事業団の三年間、二度目の解雇と続いた時期と娘さん達の進路を決める時期とが重なり、その心労も並大抵ではなかったろう。

他の団員には小・中学生やさらに小さい子供を育てている人もいる、子供達のためにも一日も早い解決を願わずにはいられない。

「標津線」

翌朝、朝食で顔を合わせると渡辺さんが、「昨日は解散した後、標茶まで行ってみたんですよ」と言う。

釧網線の標茶は、八十九年四月に赤字を理由に廃線にされた標津線との分岐点だった駅だ。

標津線は、標茶から根訓原野をつらぬいて根室標津へ至り、そしてそこから根室本線の厚床とを結ぶ、住民の重要な足だった。

八十九年二月のツアーの際に廃止寸前だった標津線に乗ったことがあるため、標津線には私も愛着を感じていた。

まして渡辺さんは、「大好きな鉄道」の一つである標津線のその後の様子をこの機会に見てきたかったらしい。

「おれたちが乗った標津線の線路はもうはがされていますよ、ああいう光景を見るのはたまらないな」

「私は九十年九月に終点の根室標津駅に寄ってみたけど、気動車と言うのかしら、あの

線を走っていた列車が一両、雨ざらしのまま放置されていたわ、あのツアーに参加したのは渡辺さんのように本務を外された東日本人が多かったでしょ、それまで冗談を言い合っていたのに、あそこに行つてあの気動車を見たらしみりしちやって、みんなとてもさびしそうな顔をしていたわ」

「わかるなあ おれだつて同じ気持ちですよ、今でもそのまま野ざらしにされているのかな？ あの時よりもっとさびついちゃって」

「清算事業団にいて最後の広域採用で東日本に来た大桃さんが、標津線の線には周辺の自治体や住民が最後まで反対したから、みせしめみたいに放置しているようだつて言つてたわ」

渡辺さんに限らず、国労の人は心底鉄道が好きな人が多い。その仕事を奪われ、みせしめのさらし者のような仕事に回されている自分の境遇と気動車を重ね合わせてしまうのだろうか。

私は都立定時制高校で給食栄養士をしているが、八十五年から経済効率だけを口実に、調理業務の民間委託化が東京都教育委員会によって強行実施され、九十一年からは全校委託化された。このことは都立定時制高校の給食調理の職の全廃を意味している。これまでも同じ職場で働いていた仲間の仕事を目の前で奪われた者として、根室標津駅の光景は私にとっても忘れえぬものとなっている。

鉄道の仕事が好きで、それだからこそ危険なもの危険なものは危険、悪いことは悪いと言え人達の力を生かさず仕事を奪うこと、そしてまだ十分走らせることの出来る列車を雨ざらしにして住民の足をなくしてしまう。

これは別々の事ではなく完全に一体の発想からなされたことだとあらためて感じた。

「座り込み」

翌十六日は朝十時から、釧路駅前で闘争団による一日座り込み行動が行われた。

駅前のガードレールに「JRは地労委命令にしたがえ」などと書かれた桃太郎旗を並べ駅の外壁を背に、二十人ほどが座り込みを始めると間もなくJRの制服・制帽を身に着けた男と背広姿の男が、座り込みをやめるように警告に来たが、やがて引き上げていった。

八十九年までは駅前で座り込みをしようとすると、元国労も含むJR社員百名近くに取囲まれたそうだが、圧力をかけられても繰り返し行動を続けた事と地労委による救済命令が出されたこともあり、現在はJR側もおおげさな妨害はしなくなっている。

駅前の人通りは少ないが、ピラを差し出せば地元の人ほとんど受け取り、捨てることもなく読んでいる。

二十人がアルバイトを一日休めば、団員の生活費がそれだけ減ることになるが、文字通り身を削る思いで実績を積み上げていく行動だ。

午後の便で東京に戻る予定の私達は、今日から中労委前で座り込みに入っている全国の仲間にあてた釧路闘争団のメッセージを託されて、釧路を後にした。

羽田に到着したその足で、浜松町の中労委前へ行つてみたが、ペンキぬりかえの名目で会館の表側には足場が組まれ、ネットが張られて座り込みは妨害されていた。

三月中は例年になく不安定な天候が続き、気温も低く雷や大雨等悪条件の連続だったが上京闘争団は妨害に屈することなく翌日から中労委前の芝公園で座り込みを続けた。私は十九日に、札幌・釧路訪問の報告を行い、その後もたびたび足をはこんで共に座り込みながら各地の闘争団の人達から、これまで作り上げてきた運動について、誇りと自信にあふれた話しを聞かせてもらった。

三月末日「現時点では解決案を出すには至らなかった」との中労委見解が出された。

この日、JR北海道は住民の声でもある全道緊急署名の受取りを拒否している。

中労委の態度に怒りを感じながら、上京闘争団の人々は、早期に地労委命令に基づいた「案」を出すことを求める闘争のさらなる強化のため、それぞれの地元に戻っていった。

「中労委解決案」

二ヶ月後の五月二十八日、この日中労委が解決案を提示することが決定していた。

朝九時、全国から五月中旬に上京し、この日を待って連日座り込みを続けていた約百五十人の闘争団員がはりつめた表情で今日も座り込みに入っていた。

釧路からも村越さんをはじめ、これまでアルバイトに専念していた中央の行動にほとんど参加しなかった人も含め、合計十一名が上京していた。

釧路駅前の座り込みにも参加していた高野さんは本来、釧路駅勤務だがこれまで「イワシの水揚げ、大根洗い、成田」の仕事をして、今は「ダンプの運転手」だそうだが、高橋さんはやっと三十代になった位だろうか、本務は車掌で闘争団結成以来土方をしているそうだ。

「解決案」が示される日とあって、テレビ、新聞社などが多数取材に詰めかけて、闘争団員の表情を追っている。

私はこれまで通り、闘争団の中に座った。

となりに座ると太田さんが「夕べはけっこう飲んで……飲むとよく眠れそうなものだけあまり眠れませんでしたね」と言う。

十時が近ずき、国労の永田委員長らが中労委の建物に入り、報道陣もそれに続いた。

緊迫した時間が流れた。そして十時三十分ごろ、まず報道関係者が出て来て、手に持ったB4の用紙を、座っている飯坂さんらの目の前に突き出して、「このような解決案が出されたようですが、これを見てどう思いますか？」と他人ごとの紋切り調で質問を浴びせかける。

飯坂さん達はしばらく無言で用紙に目を走らせていたが、やがて「一ヶ月だけ雇用？一ヶ月したらまた首にするってことかい？」、「(2)は広域採用のことだろ、それも『採用については努力する』、努力してだめならそれまでなのか？」 闘争団員の間から、地労委命令がまったく反映されていない「解決案」に対する怒りの声がもれはじめた。

廻りがしだいに騒然とするころ、永田委員長らが表に出てきた、そして闘争団員達はJR内国労組合員や支援者が多数集まっている公園に移動して報告集会が始められた。

宣伝カーの上に立った永田委員長は、中労委に対してその場で「解決案」の受取りを拒否したと報告し、今後とも闘いぬいて行かざるを得ないと続けた。

この委員長の判断に異論を唱える者はない。参加者の間には中労委に対する怒りが渦巻き集会は抗議と闘争継続の決意の場となった。

全国オルグの丸山さんは「かあちゃんに電話出来ない、代わりにしてくれ」と嘆く。「解決案」に最も期待をよせていたのは、家族達だったろう、そして家族の苦勞に少しでも報いる内容であってほしい、誰もがそう願っていたはずだ、「案」の内容に対する怒りとともに、家族のことを思えば、日頃は弱音をほかない人達もこの日ばかりはショックを隠せない。

しかし、それでも高野さんはこの日のうちに「釧路に帰ったら休まず、アルバイトに戻る」と言っているし、高橋さんは「かあちゃんを納得させなければ」とぼやくが、これも闘いが長引くことを納得してもらうわけだから、もう明日に目を向けていることになる。上京闘争団は、その夜のうちに全体集会を開いて「解決案」を拒否し、中労委に命令を求めの方針を確認した。

渡辺さん達東京の部隊も夕方から駅頭に出て、「解決案」の不当性を訴えていた。

「勝つために、勝たせるために」

昨夜に引き続き、飲まずにいられない。飲んで眠れない夜を過ごした闘争団員達は、翌朝初夏の日差しが照りつける中、抗議の座り込みで支援労組への報告オルグに、そして都内街頭宣伝行動にと新たな闘いを開始した。

各闘争団の地元でも反撃を開始している。闘争団は負けないだろう。「全員がJRに戻るまで闘う」と言う彼らの意志をどんな権力も、もはや曲げることは出来ない。

しかし残念ながら、今のところ「負けない」とことと「勝つ」とことの間には、「解決案」が示す通りまだ大きな隔たりがあるのも事実だ。

その隔たりはちょうど、まだ多くの人が「国鉄闘争」は自分とは無縁の世界の出来事であり、「闘争団」は一部活動家の集団であると考えている状況を反映しているように思う。

闘争団員はすじ金入りの活動家のように思われがちだが、これまで書いてきたように、家族思いのごく普通の人達で、組合役員の経験もなかった人が大半をしめている。

その人達が、分割民営化は鉄道の安全輸送を脅かすものであると反対し、過酷をきわめた組合脱退強要に「仲間を裏切ることには出来ない」と抵抗して国労に残り、JR不採用にされたのだ。

現在、JRでは信楽高原鉄道事故を筆頭に大小の事故が続発している、組合差別の解雇配転と極端な人員削減によって、列車や線路の整備が不十分であるうえ、乗務員は一分でもダイヤを遅らせば、処分を受けることもあるため、多少危ないと思っても自分の判断で列車を止めることが出来ないのだ。

こんなことでは、私達は安心してJRに乗ることが出来ない、理不尽なものには真っ向から対立出来る人達に一日も早く仕事に戻ってほしい。

この闘争に係わった者として、闘争団員とその家族への共感と鉄道の利用者としての切実な思いを込めて、ルポを書いてみた。

読んで下さったすべての人にあらためて訴えたい、国鉄闘争に対する理解と具体的で効果的な協力を！

(都職労 都立学校支部)

◆ 読者からのおたより ◆

都本部の実態を！ 社会党都本部の実態を貴誌をとおして、全国に伝えてください。①森田の推せんをとり消そうとしない都本部、②民社に抗議しようとする都本部、③辞めるつもりのない都本部、④処分先行の都本部。これが政構研が支配する都本部の実態です。 (東京・A)

猛烈な「社会党不信」 今週三日は戸別訪問して過ごしています。猛烈な「社会党不信」です。 (議員・H)

冷夏の稚内 いつも新鮮な記事の送稿に敬意を表します。先日、奥様が来稚されましたがあいにく都合がつかず、交流会に出席できませんでした。残念！ 少しまとまって恐縮ですが、稚内闘争団発行のニュースお送りします。なお百号となり、担当の者もさらにながばる決意をしております。このニュースは、各組合員、家庭にも配布され、闘争団の動きや支援の方のようすなどがわかり、好評を得ております。闘争団事務所も、今度は広く大きく、駐車スペースもあるところに移動し、長期の体制にしっかり備えることとなりました。フラフラしてはダメです。 (稚内・K)

編集部より 今度は私がかがいます。はじめての訪問ですが。お会いできることを楽しみにしています。岩井章さんに同行します。百号オメデトウなんていえません。ですけどよくできてますね。ニュースで団結を固めて下さい。もともとと団結の輪を拡げて下さい。ニュース本当にありがとうございます。

連合はダメよ 労働組合の主たる任務は経済闘争である。春闘での賃上げ闘争も指揮できない「連合」が政界再編などに血道をあげたり、護憲の党である社会党の基本方針にまで口出しするのはやめるべきだ。選挙結果はそれを示している。 (北海道・K)

私鉄「鹿文」人権裁判和解で勝利！ 七年半闘い続けてきた私鉄鹿兒島交通の裁判闘争が七月一六日をもって和解が成立しました。内容は原告側主張どおり二名の運転手の解雇処分撤回、そして二名のバスガイドには育児時間取得にたいし慰謝料そして謝罪することになりました。結果は、原告側の和解条項どおりの成立となり、原告四人の圧倒的な勝利の和解となりました。 (分限免職処分撤回闘争ニュース、第八八号)

貴誌に勇氣 全通組合員です。東京選挙の時、「社会通信」の記事は勇氣づけられました。案の定「民社」に行きました。何をか言わんやです。内田選挙で知り合った仲間の一部拡大しました。 (全通・E)

編集部より 拡大ありがとうございます。東京もたいへんだけど、全通ももっとたいへん。全通大会を取材してきます。

名寄支部管内で国労復帰者 私の住んでいる名寄は宗谷本線が南北に走っておりませんが、昨年十一月名寄以北の宗谷線を運輸営業線とし、社員を三百名から二百名へと削減しました。営利第一主義の典型です。労働条件は劣悪をさわめております。私の地区ではJRと闘争団で地区闘争委員会をつくって、闘争団とJRの問題を市民にアピールしてきています。本当の意味での本務と闘争団が一体となった闘いを組まなければならない時であると思っています。私の支部管内でJR発足後はじめての国労復帰者がありました。(名寄・M)